

## 直視するリアリストたち (2)

### ——直視は物事の本質を見る武器である——

直視とは「過大（過小）評価などの先入観を全く抜きにして、真実を正しく見つめること」をいう（新明解国語辞典）。

先入観なしに物事を見ること、また、事実在即してのみ物事を考えることは、日常生活においてもビジネスにおいても、極めて有効である。

こう述べる限りでは、当たり前の話で異論があるとは思えないが、建前はさておき、具体的な事案に直視思考を適用することは簡単ではない。なぜなら、われわれにとって事物や人間をあるがままに見ることは、至難の技だからである。

われわれの事実の知覚と解釈とは、分ちがたく結びついている。感覚器は対象を対象として即物的に知覚し、その後<sup>あ</sup>に解釈を加えて認識するわけではない。通常、われわれの知覚と解釈とは、渾然一体として対象を評価している。

例えば「カリスマ外科医」と聞くと、われわれは彼/彼女が立派な人物だと即断してしまう。

「いやいや、外科医の本性は目立ちたがり屋で、マスコミへの売り込みがうまいだけ。人間としては三流かも」とはなかなか思わない。

直視思考は、外的な装飾物（＝カリスマ外科医）を引きはがして、できる限り裸の事実（＝彼らの本当の技量や人間性）を探求する。だから、直視思考を追求すると、時として社会の既成の価値観<sup>あ</sup>に匕首を突きつけることになる。下手に使うと身を滅ぼしかねない。

### ——マキャベリはマキャベリストか？——

マキャベリと言えあ<sup>あ</sup>の『君主論』の著者として、あまりにも名高い。彼の君主観を抜粋する。

君主は、たとえ愛されなくても、恐れられる存在にならなければならない。信義などまるで意に介さず、奸策<sup>かんさく</sup>を用いて人々の頭脳を混乱させる君主が、かえって大事業をなしとげている（以下『人と思想 マキアヴェリ』西村貞二著より抜粋・要約）。

ひたすらに祖国の存否を賭して事を決するばあ<sup>あ</sup>い、それが正当であろうと、道にはずれていようと、思いやりにあふれていようと、冷酷無残であろうと、また称

讚に値しようと、破廉恥なことであろうと、いっさいそんなことを考慮に入れる必要はない。

そんなことよりも、あらゆる思惑を捨てさせて、祖国の運命を救い、その自由を維持しうる手だてを徹底して追求しなければならない。

君主は、いろいろなよい気質をなにもかも備えている必要はない。しかし、備えているように思わせることは必要である。

いや大胆にこう言うておこう。そうしたりっばな気質を備えていて、つねに尊重するのは有害であり、備えているように思わせること、それが有益である、と。

君主という者は、とくに新君主のばあいは、国を維持するために、信義に反したり、慈悲に反したり、人間味に反したり、宗教に反した行動にたびたび出なくてはならない。そのことを知っておいてほしいのである。つまり、一般によい人だと考えられるようなことばかりを、後生大事に守ってはいられないということである。

「人間いかに生きるべきか」ということのために、現に人の生きている実態を見落としてしまうような者は、自分を保持するどころか、あつというまに破滅を思い知らされるのが落ちである。

マキャベリの間観/民衆観も意外に厳しい。彼は「時代や国家を異にしたところで、人間の本性は変わることはない」と見ていた。

そもそも人間は、恩知らずで、むら気で、偽善者で、厚かましく、身の危険は避けようとし、物欲には目のないものである。

人間はどれほど善良に生まれつき、どんなにすばらしい教育を受けたところで、なんとやすやすと墮落してしまうものか。

すべての人間はよこしまであり、自由勝手にふるまえる条件がととのうと、すぐさま本来の邪悪な性格をぞんぶんに発揮しようとすきをうかがうようになる。

過去や現在の出来事を考えあわせてみれば、たとえ都市や国家を異にしたところで、人々の欲望や性分は、いつの時代でも同だということが、たやすく理解でき

る。

このように赤裸々に人間を観察し、見たままを記述したため、彼は「権謀術数家」「氷のように冷たい合理主義者」「目的のためには手段を選ばぬ打算家」として批判された。マキャベリの例は、観察（直視）したままを、率直に記述することの危険さを物語る。

#### ——稀代の観察家マキャベリ——

だが、彼は人間の本性を知るために、その根拠を議論に求めず、観察に求めたにすぎない。彼には、当時の混乱したイタリアの政治状況を、先入観なく観察する知的鋭敏さがあった。ちょうど、ニュートンがりんごの落ちるのを見て万有引力のヒントを得たように、マキャベリは、混迷期のイタリアと古代ローマの政治を観察し、そこから人間の本性を帰結したにすぎない。

コッホはコレラ菌を発見したが、彼がコレラ菌を創りだしたわけではない。それと同様、マキャベリは人間の本性を喝破したが、彼はマキャベリズムを実践したわけではない。それにも拘わらず、マキャベリは「悪の張本人」の汚名を着せられ、『君主論』は悪魔の書として告発され続けた。

むしろマキャベリ本人は好人物で、友に対しても誠実、愛すべき饒舌家であったと言われる。ノーベル文学賞の受賞者T・S・エリオットは、「マキャベリ個人の人生観は無邪気ともいえるもので、彼は正直な人物であった」と評している。

#### ——共和国のためなら君主を殺してもよい——

よく誤解されるが、彼は無批判に君主を称賛したわけではない。君主の権謀術数を認めたわけではない。彼の理想はあくまでも共和制の樹立であり、君主制は混迷する国を統一する過渡期の手段にすぎなかった。彼の『政略論』（デイスコルシ）を読むと、「悪の張本人」の印象は一変する。

マキャベリの主張ははっきりしている。多くの点で民衆は君主より優れ、賢明で、安定している。だから、混乱した国家を統一した後、君主は退き、後は共和国が引き継ぐべきである。しかし、現実には甘くない。やがて君主が暴君となった時、暴君に忠言できる者など1人もいない。そうなったら邪悪な君主は殺すほかはない。

宗教を破壊したり、王国や共和国を破滅に追い込んだり、人類にとって有益でかつ誇りをもたらす美德や、学問や、その他の技能を敵視する者（注：暴君を指す）は、破廉恥で呪われるべき存在である。まさに彼らこそは、不信、横紙破り、大馬鹿者、能なし、無為怠惰、卑劣と呼ぶに値する（第1巻10章。世界の名著21 マキアヴェリ 責任編集 会田雄次 中央公論社）。

誤った人民を説得するよりも、誤った君主を説得する方がむずかしい。多くの暴君は殺すよりほか救う道はない（第1巻58章。以下、大橋武夫氏の『マキアヴェリ兵法』PHP 研究所より引用）。

人民の騒乱はそれほど恐れることはない。しかし騒乱に乗じて僭主がのし上がってくるのが恐ろしい。君主の場合は、君主の暴虐そのものが恐ろしい。従って君主の生命さえ尽きればすべてが良くなるのである。

君主も国の分断と混乱を收拾し国を統一するための道具であって、共和制に戻る為なら使い捨ててもよい。主体はあくまでも人民、共和国であり、君主ではない。

マキアヴェリにとって、共和国の維持（=自由な国家の維持）こそ究極の目的であり、君主はそれに至る手段に過ぎなかったのだ。

#### ——モンテーニュの浅い交際——

さて、マキアヴェリほどあからさまには語らないが、モンテーニュの『随想録』もまた、人間性と物事の本質を穿つ記述にあふれている。

彼にはラ・ボエシという夭折した親友がいたが、一般的には世間でいわれる友情を信じていなかった。

要するに、われわれが普通に友とか友愛とか呼んでいるものは、何かの便宜のために結ばれた親交に過ぎない（以下、『随想録』モンテーニュ 関根秀雄訳より抜粋・要約）。

かかりつけの医者や弁護士は、技量さえ優れていればそれ以上は期待しない。下男は勤勉であればよく、驢馬引きは馬鹿でなければよく、料理人は腕さえ良ければよい。彼らが不純であろうと、博打打ちであろうと、強情であってもモンテーニュは構わない。

浅い交際に適する人々は容易に見出されるが、お互いが心の奥底から契り合う交際は滅多にない。そこでは、すべての動機が完全に純粹で確実であることを要するからである。

ただある一点によってなりたつ交誼においては、特にその一点を危うくしそうな不完全な点を補ってゆけばよい。

私の医者や弁護士は、どんな宗派に属していようと、それはどうでもよいことだ。そういう問題は私には何の関係もない。

また召使たちと私との間に生ずる主従のよしみについても、同様に考える。

だから下男については、彼が純潔であるかどうかをあまり問わない。ただ勤勉であるかどうかを問う。驢馬引きは博打うちでもかまわない。ばかでなければよい。料理人は強情でもかまわぬ。腕さえあればよいのだ。

テーブルを賑わすためには、考え深い人でなしに面白い人を招く。寝床には善い心根よりも美しい肉体を迎える。議論の仲間には才能ある人を選ぶ。必ずしも廉潔の士でなくともよい。

#### ——常識という幻想——

モンテーニュのこの直截的な言い方には、鼻白む思いをする人が多いだろう。部下に向かって、「性格は悪くても仕事さえできればよい」と言う上司はいない。恋人に向かって「肉体的魅力があればよく、精神的な結びつきは求めない」という男は確実に嫌われる。だが、彼の言い回しに抵抗を覚えつつも「なるほど」と思うのは、確かに現実の人間関係の一面を深く穿っているからである。

モンテーニュは世間の常識を腑分けし、それが幻想であることを分析するのに巧みだった。以前掲載した「わが友モンテーニュ」の繰り返しになるが、王侯や神学などの権威を嫌うモンテーニュの思いを引用する。

彼は数多くの部下に守られながら、トイレを使っている王をこう皮肉る。

私は一人の分別のある人間が、便器にまたがっているところを20人もの人に見守られていることが、何か大した幸福であるなどとは一度も考えたことはない。

当時キリスト教を否定するのは社会的な自殺を意味したから、彼はあからさまに神を否定しなかった。それでもこう言い放つ。

私は奇跡というものには、断じて手を触れぬのである。私はいささかも神学には通じていない。私は神学のことなど一向にわからない。

権威には固有の価値があるわけではない。権威は、所詮、追従者たちが作り出した幻である。人々が仰ぎ見るから権威は効果を発揮する。それを認めない人にとって、権威は何の価値もない。彼にとっては、神や王侯の権威も形無しであった。彼は権威者と知的にはるかに優位に立っていた。(注)本稿は、50代するとき発表した原稿を基に、最近のわたしの考えを加筆した。